

## 共同運営部門：〈周産期センター〉新生児医療センター

### —概要—

泉州広域母子医療センターにおける小児科の役割は、新生児医療センターにおいてはNICU(neonatal intensive care unit)・GCU(growing care unit)の管理、運営が中心である。産科医療センターでは、ハイリスク分娩の立会い、正常新生児の包括的ケアを行っている。

今年度の陣容は、常勤医5名(昨年度から実質1名増、うちわけは、1名は研修終了後、当センターへ就職、また1名はかつて当センター小児科で2年間後期研修を行った医師の就職、また1名は大阪母子医療センターへ移動のため退職)、後期研修医3名の8名である。

周産期医療の中心は、やはりNICUの運営である。大阪府内におけるハイリスク妊娠・分娩および新生児の診療に対応すべく、当センター産婦人科は産婦人科診療相互援助システム(OGCS)、小児科は新生児診療相互援助システム(NMCS)に参加し、泉州地区周産期医療の活動拠点となっている。OGCSからは緊急母体搬送の受け入れ、NMCSからは疾病新生児や早期産児の搬送を受け入れている。2001年9月以降、NICUへの早産児受け入れ基準は、在胎25週以上、出生体重500g以上とし、本格的なNICU稼働への態勢を維持した。2008年4月から稼働した泉州広域母子医療センターも順調に機能しており、当初想定した年間分娩数を消化している。また、GCUを拡張できたことによって、NICUをより効率よく運用することができるようになった。母体搬送も、より早い時期の切迫早産を呈する症例の受け入れが可能となっている。

このように、当センターの周産期医療体制が維持できていること、更なる充実を目指して、2015年1月より早産児の受け入れ基準を在胎24週以上と、これまでより1週下げることとした。わずか1週の違いであるが、未熟性はかなり強くなるので、より重症度の高い早産児の診療体制が必要となる。

周産期医療に欠かすことのできない眼科診療は、当センター眼科が2015年3月末をもって引き揚げたため危機的状況に陥ったが、和歌山県立医科大学医学部眼科学講座が週1~2回、NICUに往診、必要時にはレーザー治療を担当していただけることとなった。また、外来でのフォローは近隣の野上病院眼科医にお願いし了解いただいた。十分とは言えないものの、とりあえずNICUを継続していけることとなったが、今後、眼科常勤医の確保は当センターの重要課題の一つとなった。

### —実績—

NICUの入院統計を表1に示す。泉州広域母子医療センター開設後、入院数は100人前後を維持しているが、一昨年度の入院数は149人と例年に比してかなり多かった。昨年度は95人、今年度も96人で、入院数としては通常の状態に戻っている。新生児医療センターは、現在NICU6床、GCU6床での運営である。当初、GCUを12床でスタートする予定であったが、助産師、看護師の不足により6床となった経緯があるが、現状6床でその機能を果たせていると思われる。

今年度の入院数96人中、極低出生体重児は21人(21.9%)、うち超低出生体重児は4人(4.2%)、昨年度と比べて、超低出生体重児の入院数は激減したが、医療内容的には泉州南部における地域周産期センターとしての役割を十分に果たせていると思われる。母体搬送後に出生し、NICUに入院となった児は院内出生66人中、16人(24.2%)、少産少子化、出生数が伸び悩む中、母体搬送後の母体治療、切迫早産の対応などにより、分娩に至らず妊娠を継続出来た症例も多々あり、やはりOGCSもその機能を十分に果たしていると言えよう。

一方、NMCSによる新生児搬送症例は、昨年度と同じ30例(31.3%)であった。極低出生体重児の院外出生2例が新生児搬送入院となっているが、これは、総合周産期センターが満床のため、急性期を脱した児を受け入れたものである。これも、地域周産期センターの役割の一つといえる。このように、NMCSも十分の機能を果たしている。今年度、周産期センターでの死亡例はなかった。

表 1. NICU 入院数

(2016.4~2017.3)

出生体重(g)	院内出生	母体搬送	院外出生	計	IPPV	N-DPAP
<500	0	0	0	0	0	0
<1000	4	1	0	4	4	3
<1500	15	5	2	17	9	13
<2000	17	6	5	22	7	7
<2500	18	4	3	21	3	4
≥2500	12	0	20	32	5	3
計	66	16	30	96	28	30
在胎期間(週)	院内出生	母体搬送	院外出生	計	IPPV	N-DPAP
<25	0	0	0	0	0	0
<28	6	2	0	6	6	5
<30	4	0	2	6	3	6
<32	8	3	0	8	5	6
<34	16	7	4	20	6	5
<37	19	4	2	21	5	5
≥37	13	0	22	35	3	3
計	66	16	30	96	28	30

## —今年度の成果と反省点・来年度への抱負—

少産少子化が止まらない現在ではあるが、周産期医療が欠くことのできない医療であることはまちがいない。特に、泉州南部においてはその中核センターとして機能を維持することができている。しかし、専門医制度が開始になる状況にあつて、人員を確保できるかどうか、当センターでの周産期医療を維持できるかどうかにかかっている。周産期医療の中身もより細やかさが求められる時代に入ってきているが、その期待に応えられるかは、小児科の維持一つにかかっている。